歴史地理学　40－5（191）22～42　1998.12

岩木山における参詣登山道の歴史的変遷

金　子　直　樹

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．中世以前の登山道
(1)　里宮移動伝承と大石口
(2)　岩木山3峰の別当寺と登山道
Ⅲ．近世の登山道
(1)　津軽藩の施策
(2)　お山参詣と百沢口
(3)　その他の登山道
Ⅳ．近代の登山道
(1)　神仏分離と岩木山の再編
(2)　お山参詣習俗の変化
(3)　登山道の多様化
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

青森県津軽平野の南西部に位置する岩木山は，古くから津軽地方で信仰されてきた。この点に関して，現在まで数多くの研究・報告等がなされているが，それらの多くは，以下にあげる岩木山信仰の2つの側面のうち，主としてどちらか一方を対象としている。

岩木山信仰の1つの側面は，南麓の百沢（ひゃくざわ）に鎮座する里宮の岩木山神社を中心にしたものであり，これは近世から続けられてきた岩木山への参詣習俗－お山参詣－によって，最もよく具現化されている。お山参詣は毎年旧暦8月1日を中心に行われ，津軽の年中行事の1つにあげられるほど，津軽各地から多くの参詣者を集めてきた。この習俗の実態について，これまで民俗誌や研究論文，教育委員会等による民俗調査報告書，各市町村史等により，数多く報告されてきている[1]。筆者は前稿において，これらの報告を網羅的に検討し，その結果，地域によって初参り年齢や参詣登山道の選択等に差異が存在したことを確認した[2]。

ところで参詣登山道については，麓に里宮が鎮座する南東麓の百沢口を中心として，南西麓の嶽（だけ）口，北西麓の長平（ながだい）口，北東麓の大石口が使用されていた（図1）。主として民俗学者による民俗誌や研究論文では，「一般に長平口の登拝形式が古風な型を残している」[3]，「西津軽郡地方は（中略）北麓の長平口を利用する他に，古態を思わせる（中略）特異的な登拝習俗が第二次世界大戦以前まで残っていた」[4]といったように，百沢口では失われたとされる「古習」[5]が長平口からの参詣習俗に残存していると指摘されている[6]。これは以下の認識に基づくと推察される。すなわち，主として第二次大戦後，南麓の百沢が観光地として変貌し，同時に当地のお山参詣も伝統的習俗が失われたのに対して，長平など北麓ではそのような変化がなく，そのために古い習俗がまだ残存しているというものである。つまりこれは，調査時点での状況から導き出された評価であった。しかし登山道や参詣の歴史的側面，例えば長平口がいつ開かれ，参詣がいつ始まったのか等という基礎的検証についてはほとんど行われていない。

岩木山信仰のもう一方の側面として，北麓

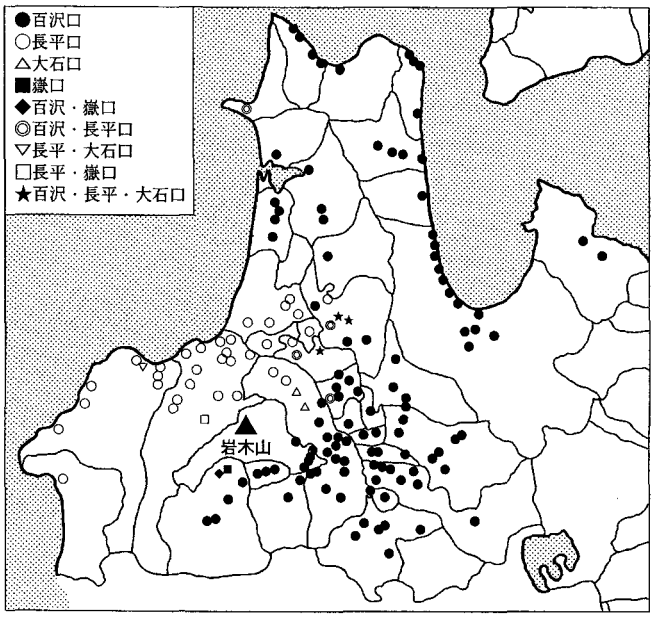


図1　お山参詣における利用登山道
注）本文注2)をもとに作成

の赤倉沢を中心にしたものがあげられ，これはカミサマとかゴミソ等と呼ばれるシャーマン系の宗教者達の存在により確認される。彼らの多くは岩木山の神（赤倉大神等と呼称される）を信仰して，赤倉沢に堂社をかまえて修行を行ったり，自らの信者のために祈禱・卜占等をしている。これらは特に赤倉信仰とも総称され，これまで宗教学・民俗学を中心として，その実態が明らかにされてきている[7]。そして赤倉信仰は，観光等の影響を受けた南麓の百沢・岩木山神社とは異なり，岩木山信仰の原初的な性格を残していると指摘されている[8]。これは，賑やかだが信仰の祖型が失われた「表側」の南麓，鄙びてはいるがそれを垣間みせる「裏側」の北麓という対比関係によって，岩木山信仰を説明しようとする発想であった。

こうした発想は，岩木山信仰の歴史的過程とも関係している。それは，岩木山の里宮である下居宮（おりいのみや）が，当初は北麓に存在し，登拝も赤倉沢を通過する大石口からなされていたが，後に南麓の百沢に遷宮し，登拝も百沢口からに変わったとされる伝承である。さらに，遷宮した「表側」の下居宮とその別当寺である百沢寺（ひゃくたくじ）（現・岩木山神社）は，近世の津軽藩の影響下に組み込まれ，それ以前の様相が失われたが，「裏側」の北麓では，そのような支配が及ばず，赤倉信仰に代表されるような原初的な山岳信仰の性格が残存したと解釈されている。以上によって，岩木山信仰の祖型を考察する際，北麓の赤倉信仰が南麓より歴史的に古く，かつ観光などの影響は少ないという見方は，一種の「通説」としての説得力を有している。

だがこの「通説」は，現代の宗教的状況と伝承によって赤倉信仰の歴史性を理解しようとするものであり，必ずしも文書史料によって十分に裏打ちされているわけではない。伝承世界と現代との連続性を指摘するものの，状況証拠をあげるのみで直接的な論証はなされていないのである[9]。

以上，岩木山信仰の2つの側面に関した諸研究の問題点を概観した。長平口における「古習」にしろ，「裏側」の赤倉信仰に岩木山信仰の祖型を想定する「通説」にしろ，いずれも再検討の余地が残されているのである。特にどちらも登山道とその周辺地区における宗教的な状況に依拠しているにもかかわらず，その基礎的な歴史的検証が十分とはいいがたい。そこで本稿では，それらの検証のため，岩木山における登山道やその周辺地区の変遷状況を通時的に確認していくことにしたい。

従来地理学において，こうした登山道や参詣道に関しては，山岳宗教集落を利用する信仰者数の時代的変化等の検討によって登山口の変遷を明らかにしたり，各地に残されている道中日記を史料としてその復元を試みる研究が一般的である[10]。しかし岩木山では，宿坊を経営する御師のような宗教者は存在していないため，明確な山岳宗教集落は存在しない。

また岩木山のお山参詣習俗は，通常1泊2日程度の比較的短期間に行われるものであり，近世史料でも参詣の出来事を簡単に記録しているにすぎず，参詣路の正確な復元は困難である。

そこで本稿では，近世・近代に記録された様々な岩木山関係の史料類を基にして，登山道やその周辺地区の状況を確認していくことにする。考察の基礎となった史料は，近世に岩木山を庇護した津軽藩のものが多いが，同時に津軽の各地に残された日記類や新聞記事，天明や寛政年間に津軽に滞在して，多くの紀行文を残した菅江真澄による記録等も利用した。次章以降では，中世以前から近代までの登山道の時代的盛衰を主としてたどりながら，岩木山信仰の状況を確認し，これまで主張されてきた「通説」等の妥当性について検討する。

II．中世以前の登山道

岩木山では，中世以前の具体的な様子を窺わせる史料は残念ながら残されていない。わずかに，近世以降に記録された岩木山の開山縁起や縁起伝承を断片的に記した史料が残されているのみである。このような史料的限界を認識しつつ，ここではそれらを中心にして，中世以前の登山道を検証する。

(1) 里宮移動伝承と大石口

百沢寺十世朝祐により元禄14年（1701）に作成された岩木山の開山縁起「岩木山光明院百沢寺」に代表される岩木山の伝承は，細部を除けば基本的に同内容となっている。すなわち，延暦年間を中心にした奈良時代末期から平安時代初期，里宮（下居宮）と別当寺が十腰内（とこしない）（現・弘前市十腰内）周辺の岩木山北麓に創建される。しかし，「此時山東十腰内村有別当寺院坊舎而自是令山上之処，動参詣之人中忽消有之」と記されているように，十腰内からの登山道において怪異現象に遭遇した参詣者が頻出したため，南麓よりの登山道（百沢口）を使用する現在の百沢に下居宮と別当寺が移転された。その後，北麓にあった別当寺は「退転」し，近世初期の寛永2年（1625）に，津軽藩の庇護をうけた百沢寺に「混集」されたとしている[11]。

この縁起伝承から，中世以前から岩木山への参詣が行われていたことが窺われる。無論この程度の記述からでは，当時の参詣が近世以降に確認されるお山参詣と同様なものであったかどうかは定かではない[12]。ただ少なくとも，十腰内の別当寺から岩木山への参詣登山道が延びていたと考えられる。

では，怪異現象が発生したという十腰内からの登山道は，どこを通っていたのだろうか。現在，十腰内を起点にする登山道は確認できない。「岩木山光明院百沢寺」では，怪異現象の原因として，まず参詣者の「精進不潔斎所以」を述べているが，さらに「彼精鬼令所為」と鬼神の存在をあげている。この鬼神は，「岩城嶽の北赤倉のいはや」[13]等と呼ばれる場所に棲むとされている。これらは具体的に，岩木山の峯の1つで「赤倉が嶽」の別称をもつ巌鬼山（がんきさん）や，その北東に位置する赤倉沢付近をさしていると考えられる。

岩木山に先住したとされる鬼神は，山麓の農民のために霊力を発揮して開墾を手伝うような善神とされる一方[14]，人々を悩ませる邪神とも位置づけられている。鬼神は坂上田村麻呂や花若麿などの岩木山開山の主導者によって退治された後に，神に仕える眷属になって，赤倉に封じ込められたものの，十腰内からの登山道において怪異現象を発生させたとされている[15]。したがって，ここでいわれる登山道は，上記の鬼神伝承のある巌鬼山や赤倉沢を通過する現在の大石口とほぼ同様のルートをとっていたと推定される。菅江真澄は，この登山道が「いとさかしく，身をあやまつことをりをりなれば，とどめて，今は百沢をふもととぞせりけるとなん」と記しており[16]，当時の大石口が，物理的にもかなり危険な道であっ

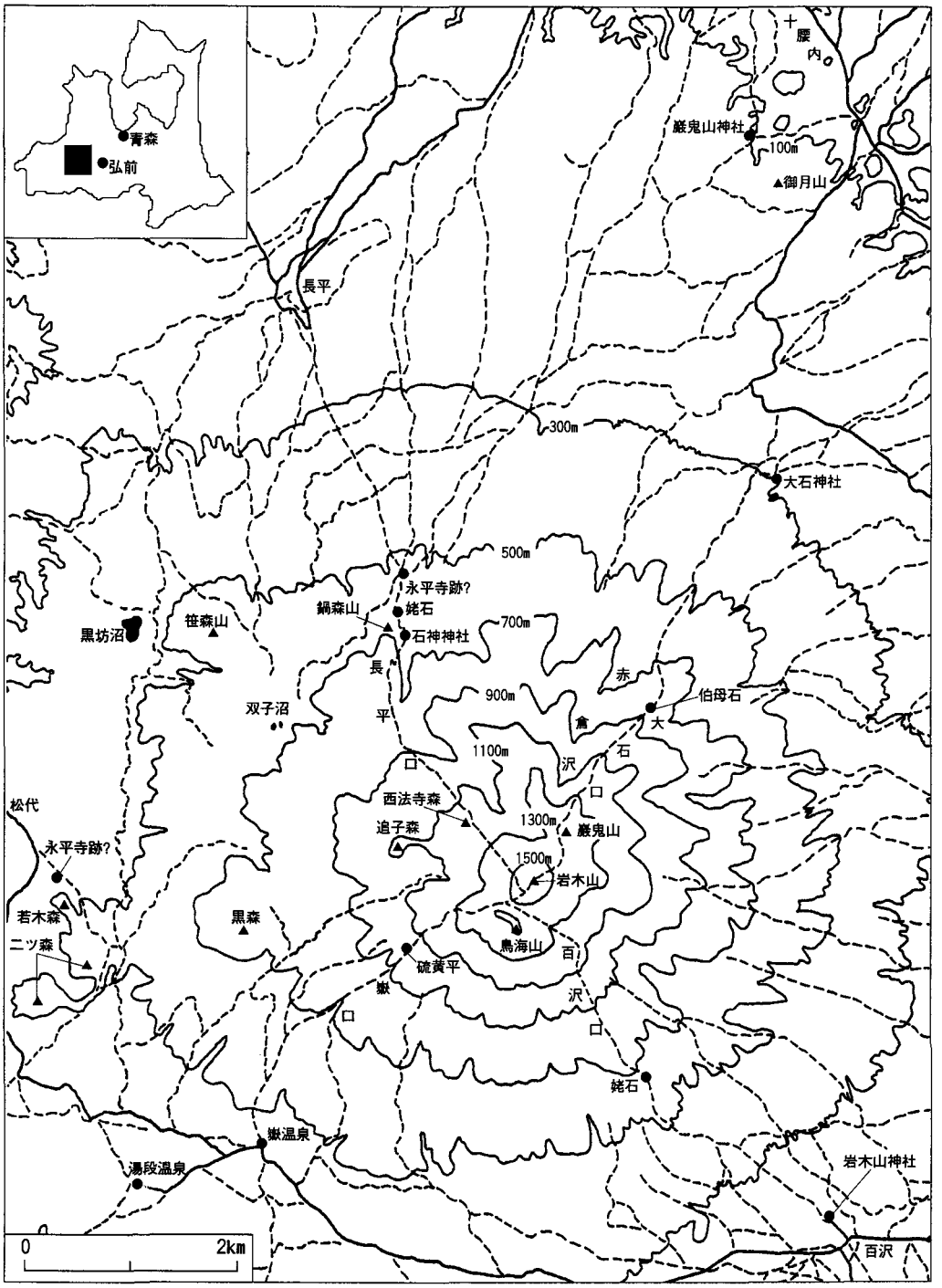


図2　岩木山周辺図

注1)　陸地測量部発行　大正元年測図・4年製版1/50000地形図　弘前・五所川原・川原平・鯵ヶ沢を基に筆者が作成

注2)　実線は里道以上の道路，破線は小径を示す

たと推測される。

ところが現在の大石口は，百沢口よりも傾斜の緩やかな尾根筋の道であり，けっして険しい登山道ではない。明治政府の方針により，岸 俊武によって編纂された『新撰陸奥国誌』にも「七八合目までは牛馬も通ひ十腰内村の方山勢分けて険ならされども」と記録されていることから，十腰内からの登山道がそのまま現在の大石口であるとは考えにくい[17]。ここで想定されうるのは，赤倉沢をそのまま谷筋にすすみ，谷奥の急勾配の岩壁帯からそのまま巖鬼山に到達するルートである。現在ここは，春先の残雪期を除くと，落石の危険があり，登山は困難な状態になっているという[18]。おそらく，伝承にいう登山道は，現在の尾根筋ではなく，このような険しい赤倉沢筋のルートをとっていたと考えられる。

(2) 岩木山3峰の別当寺と登山道

以下では，別当寺から登山道が延びていたと仮定して，別当寺について検討していく。縁起伝承に登場する岩木山の別当寺は3寺あり，それぞれ岩木山の3つの峰に対応している。中央の岩木山には百沢寺光明院，左峰の巖鬼山には十腰内村の西方寺観音院，右峰の鳥海山には松代村の永平寺景光院がそれぞれあてられている。しかし，一見整然としている別当寺の構成には，不明瞭な部分が残される。それは，百沢寺が里宮の百沢移動後に成立した別当寺であるのに対し，他の2寺院は里宮の移動前から存在した別当寺であることである。

とするならば，百沢寺成立前の岩木山別当寺は，一体如何なる寺院だったのだろうか。縁起では，単に「此時山東面十腰内村有別當寺院坊舎」とするのみで，具体的な寺院を特定していない[19]。十腰内にあった別当寺であるならば，この記述の前にある「十腰内村巖鬼山西方寺観音院」が想定される。現在，十腰内には百沢寺成立前の寺社であったという伝承を持つ巖鬼山神社が鎮座しており，この神社で近世に祀られていた仏像は，西方寺の古仏であったと伝えられている[20]。しかし縁起では，西方寺は岩木山ではなく巖鬼山の別当寺とされており，また菅江真澄の記録や『新撰陸奥国誌』においては，遷宮前に百沢寺の前身となる寺院が，西方寺とは別に十腰内に存在していたとしている[21]。このように判然とはしないが，大石口での怪異現象が，別当寺の百沢移動の原因であることから，大石口の起点であった十腰内に別当寺（西方寺や百沢寺の前身となる寺院）が存在しており，これらが百沢寺成立前の別当寺であったと考えられる。

次に，もう1つの別当寺である鳥海山永平寺景光院と，お山参詣の「古習」が残存したとされる長平口について検討する。鳥海山別当寺の永平寺景光院は西麓の松代村に存在したとしている。永平寺は，寛政9年(1797)の「小沢分帳」[22]によれば，松代村東方の若木森や二ツ森付近の桂光林と呼ばれる地点がその跡地とされている(図2～図4)[23]。しかし，永平寺から延びる「松代口」と呼べるような登山道は，縁起伝承は勿論，近世・近代においても確認されない。また，長平口についても，お山参詣を確認できない中世以前の状況については，縁起伝承に記載されていない。次章で述べるように，長平口周辺には別当寺の存在が伝承されているが，これは長平口の存在自体が確認できる近世末期以降に成立したものと考えられる。このように縁起伝承では，「松代口」や長平口に関しては，何も伝えていないのである[24]。

以上，岩木山の開山縁起や縁起伝承を基にして，中世以前の登山道について検討した。里宮や別当寺は，当初は十腰内や松代を中心にした北麓に存在したが，確認される登山道は鬼神伝承のある赤倉沢を通過する大石口のみであった。しかし結局，鬼神による怪異現象が発生する大石口を避けるため，南麓の百沢に里宮等を遷宮し，登山道も百沢口になっ

表1　近世の地誌・紀行類における岩木山参詣に関した記述

史料名（成立年代）	岩木山までの経路	参詣の日程	備考
『和漢三才図会』（1716）[1]	「本社在百沢寺上山，登凡三里」	「自八朔（八月一日）至重陽（九月九日）之中，七日潔斎可登，他日不許」	
『津軽一統志』（1731）[2]	「当城（弘前城）西へ去る三里住麓至于嶺三里」	「毎歳八月朔旦至十五日（中略）予構別居或者一七日或者二三七箇日垢離潔斎而蝿誦文為礼而後登山」	赤倉に関する記述有
『津軽見聞記』（1758）[3]	「岩木山は弘前より西にあって麓まで道法三里，又麓より峰まで三里あり」	「例年八月朔日より同十五日迄，参詣の人一七日の間垢離をとりて登山す。常は登る事かなはず」	津軽を旅した上方商人の記録
『奥民図彙』（1781～1800）[4]	「登山ノモノ昼夜ニカキラス多シ 百沢寺ノ山内ニテ水ヲアヒ ソレヨリ山ニ昇ル」	「八月朔日ヨリ十五日迄ノ間岩木山へ参詣スル人群集ス」	津軽藩士による津軽の民俗・風習の記録
『奥のしをり』（1843）[5]	「それ（高岡）より一里余百沢と申所へ参り申候，此所岩城山下にて八月朔日御山へ登山の泊り場所にて，岩城山百沢寺と申御寺有之」	「八月朔日御山へ登山」	江戸の落語家による東北地方の旅日記

1）『和漢三才図会』岩城山権現条，本文中注34）486頁。2）『津軽一統志』首巻 岩木山条，本文中注26）8頁。3）『津軽見聞記』，宝暦8年（1758）（新編青森県叢書刊行会編『来遊諸家紀行集2（新編青森県叢書3）』，歴史図書社，1973）468頁。4）『奥民図彙』，本文中注35）257・264頁。5）船遊亭扇橋『奥のしをり』，天保14年（1843）4月17日条（『奥のしをり（アチックミューゼアム彙報21）』，アチックミューゼアム，1938），52頁。

たと考えられる。

III. 近世の登山道

(1) 津軽藩の施策

近世の岩木山信仰は，天正年間から津軽地方を統治した津軽藩の影響下に置かれることになる。津軽藩は津軽の寺社を自らの支配機構に再編し[25]，岩木山別当寺の百沢寺もその中に組み込みまれた。その中で津軽藩は，藩の官撰史書『津軽一統志』に「当国之鎮守」[26]と記されているように，岩木山に津軽の「総鎮守」という宗教的権威を付与し，百沢寺をその宗教的権威にふさわしい寺院に整備した。

まず津軽藩は，天正17年（1589）に炎上した百沢寺に対し，慶長6年（1601）に下居宮，慶長8年（1603）に大堂をそれぞれ再建する[27]。以後，貞享3年～元禄3年（1686～1690）の大修築等にみられるように，百沢寺の堂宇は，藩によってたびたび再建・修理を受けることになった[28]。一方津軽藩は，寛永2年（1625），「久しく退転」していたとされる西方寺観音院と永平寺景光院を百沢寺に「混集」し，同時に百沢寺に寺領200石を与えた。寺領は寛永17年（1640），さらに200石を加増され[29]，百沢寺は領内寺社で最高の寺領400石を得るに至る。また寛永3年（1626）には，領内真言宗系寺院から「御国五山」を選出し，百沢寺もその一寺に位置づけられた[30]。このような津軽藩の施策とともに，岩木山は17世紀後半～18世紀初頭に至って，津軽の「総鎮守」の地位を確立することになるのである[31]。

(2) お山参詣と百沢口

その状況下，貞享元年（1684）の津軽藩の記録には「八月朔日　百沢寺為御代参岩木山江登山踏初仕候　於百沢堂篭仕候参詣之者ハ各別 其外弘前在々浦々より大勢朔日ニ参詣仕候へハ取込　御祈禱之障ニ罷成候間　同従二日参詣仕候様ニ致度之旨　訴状出之」[32]と

いう文言がみえる。これは，おそくとも17世紀後半には，津軽の民衆が百沢口から岩木山に参詣登山していたことを示している。しかも，「八月朔日」前後に参詣しており，現在行われているお山参詣習俗の原型が，この時期すでに成立していたと考えられる。近世のお山参詣に関して，津軽藩はその規制を促す触書を数多く出している[33]。それら触書が出された背景には，当時のお山参詣が，盛んに行われていた実態があったと考えられる。

近世のお山参詣や岩木山の具体的な概要を記したものとして，『和漢三才図会』をはじめ，いくつかの地誌・紀行文が確認できる（表1）。それらの記述のうち，登山道に関しては，「本社在百沢寺上山登凡三里許」[34]，「百沢寺ノ山内ニテ水ヲアヒ　ソレヨリ山ニ昇ル」[35]等とある。ここから，百沢寺から頂上に至る百沢口を，参詣登山道としていたことが確認できる。一方，縁起類にあった大石口等の登山道に関する記載はみられない。近世末期に描かれたと思われる絵図においても，百沢口のみが登山道として記され，他の登山道に関しては何も示されていない（図3[36]）。このことから，近世におけるお山参詣時の登山道は，百沢口のみが利用されていたと考えられる。

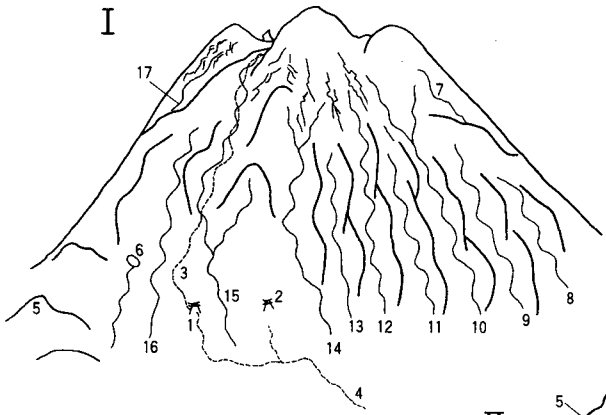
(3)　その他の登山道

以上の通り，近世においては百沢口が参詣登山道であると確認された。では，その他の登山道，特に百沢口以前の古道と縁起類に伝承されている北麓の大石口や，お山参詣の「古習」がみられたとする長平口等は，近世には如何なる状態にあったのだろうか。確かに，上記史料類ではそれらの記載はない。しかし，それらが全く存在していなかったと判断するのは早計である。当時の岩木山は，信仰の対象となるような聖地として畏敬されるだけではなく，民衆が薪炭・馬草等を得るために利用する場所でもあった。このことは，岩木山麓における周辺村落の利用権を，例えば「一細長根　高杉組　蒔苗村　一 鍋形乃沢于平沢切　駒越組　宮地村」等と沢筋ごとに設定，記録した「小沢分帳」からも確認できる[37]。この山麓の状況からすれば，当然のことながら，そこを利用するための道が存在していたと推測される。図2に示した通り，大正元年(1912)測量の地形図には，多数の道が記載されている。これは近代の状態ではあるが，おそらく近世においても，このような道があったのではなかろうか[38]。こうした状況からすると，近世の大石口や長平口は「道形僅に残り山樵の往来する処となれり」[39]ともあるように，基本的にはこの入会利用の道の1つとして利用されていたのではないかと考えられる。以下では，2つの登山道について検討する。

①大石口：近世史料において，大石口をお山参詣時に使用した記録は確認できない。「小沢分帳」では，大石口の通る赤倉沢一帯は，周辺8ヶ村（現・弘前市北部～北津軽郡鶴田町）の利用場所となっていた[40]。したがって大石口は，この地区に入るための道として使用されていたと考えられる。

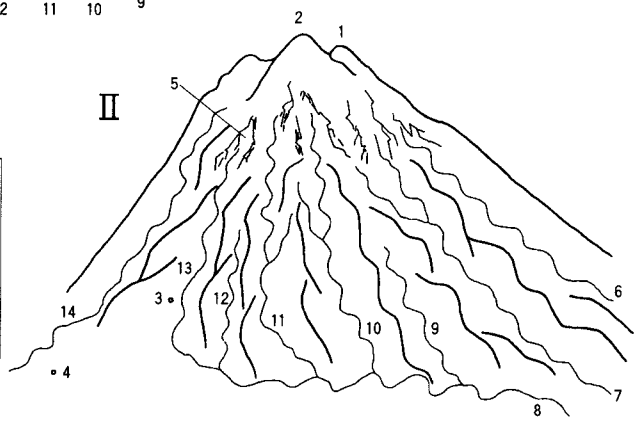
ところが，この地区は単なる入会地だけではなかった。前述のように，大石口は経路途上で鬼神が怪異現象を発生させた登山道と伝えられている。この伝承は，別当寺移動の原因として記述されているが，一方では，赤倉にそのような鬼神が棲息するという認識が存在したことを示唆している。『津軽一統志』にも，「赤倉　山上有洞名之　所謂　二鬼所住岩窟也云」[41]と記されていたり，赤倉に入った人の不思議な体験を記録した奇談[42]が残されていること等から，鬼神の棲む赤倉の異界としてのイメージが近世に定着していたことが確認される[43]。

これまでの岩木山信仰研究の「通説」では，この赤倉の鬼神こそ，坂上田村麻呂等に征服された先住のカミであり，また津軽藩等の支配者が，南麓の百沢寺を保護しつつ，同時に岩木山を支配しようとしても，この鬼神はそれに屈することなく，その宗教的な力を残存



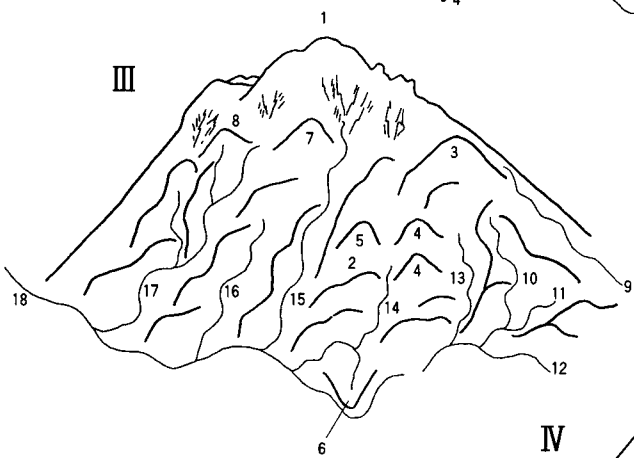
Ⅰ岩木山前面東向之図

1百沢御宮	2高岡御宮
3道者道	4弘前街道
5守山	6大清水
7八ツ森沢	8小杉沢
9瀧ノ沢	10大黒沢
11壁倉沢	12一本木沢
13仮橋沢	14後ロ長根沢
15蔵助畑沢	16畑沢
17毒蛇沢	



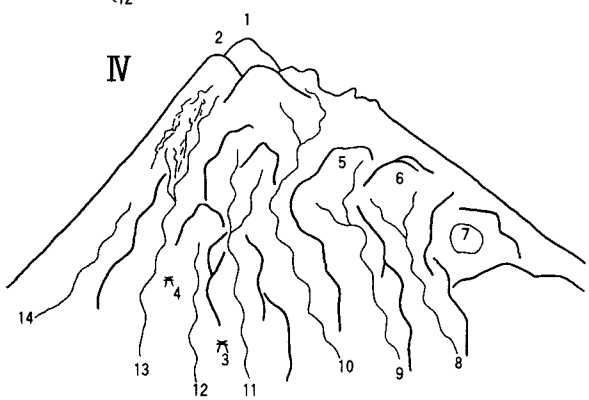
Ⅱ岩木山南面之図

1岩木山	2鳥海山
3崇湯小屋	4湯段
5硝黄平	6毒蛇沢
7瀧沢	8湯ノ尻川
9鍋形沢	10平沢
11柴カラ沢	12砥上ヶ沢
13湯ノ沢	14湯段沢



Ⅲ岩木山西面之図

1岩木山	2永平寺跡
3黒森	4二ツ森
5若木森	6抗子森
7追子ノ峯	8鍋森
9黒沢	10森合沢
11船打沢	12中村川上水
13寒水沢	14門ノ尻沢
15赤沢	16苗代沢
17白沢	18中村川



Ⅳ岩木山北面之図

1岩木山	2巌鬼山
3十腰内観音	4大石宮
5西方寺跡	6笹森
7黒坊沼	8鱒沢
9徳明沢	10鳴沢
11長前沢	12白狐沢
13赤倉沢	14カレイ沢

図3　岩木山図

注1)　弘前市立図書館　八木橋文庫蔵をもとに筆者が作成

注2)　他に「岩木山琉黄岱西向」・「岩木山並同道之図」の2図もあったが，本稿では割愛

させてきたとする[44]。縁起伝承に登場する鬼神が，近世においても畏敬されながら確かに信仰されていたことを考えれば，これは妥当な解釈といえる。しかしながら，現代のカミサマ系宗教者達が行っているように，近世においても赤倉が脱俗志向者の行場や隠遁の地であったとまで想定し，ことさらその異界性を強調する[45]のは，いささか偏向している。前述の通り，この地区を含めた岩木山麓は，民衆が山仕事を行う場所でもあり，決して俗人が近寄らぬような聖地とはいえなかったのである。

また，赤倉の鬼神は，怪異現象を発生させる一方，農民たちを助ける農耕神としての性格も有していた。それは，「流水涓々として地の高低曲直に随て漲り来る」と『新撰陸奥国誌』に記されているように，鬼神が農民のために逆流する水の流れを作ったとする伝承から窺える。ここには，「この水旱霖増減せず溝洫騫崩の憂なし」[46]とまで記されているが，逆に言えば，この鬼神を，農耕に必要な水を恵んでくれる存在と理解していたと考えられる。この伝承により，近世，大石口経路上の赤倉沢や巌鬼山は，雨乞い祈禱の場所となっていたのである。例えば，旧津軽藩士・藤田貞元らが津軽藩の文書をまとめた『津軽歴代記類』には，「延享元年五月朔日　去年初旬より此頃迄，四十余日雨不降田畑干損ニ付今日諸山へ雨乞祈禱有，山伏拾人赤倉へ登 雨乞あり」[47]とあり，宗教者が(多くの場合，藩命により)祈禱に行っていたことが確認できる。一方，賀田(よした)村（現・中津軽郡岩木町賀田）の商人の日記には「六月十二日　朝より暑なり　一昨日ならびに一昨昨日新田在の人岩木大石上赤倉へ大勢参り　御神酒弐斗樽にて　馬へ付け

その外鯡など上げ雨乞い相祈り候よし 尤も馬の骨など持参　大勢にてみがきにしんなど投げちらし口々に雨乞い候よし」[48]とある。このことから，一般民衆も雨乞い祈願のため，赤倉に足を踏み入れていたようである[49]。ただしこれらの多くは，もっぱら赤倉沢で祈願を行っていたと考えられ，当時の大石口の登山道が，どこまで通じていたかは不明瞭なままである。

しかし，大石口は，菅江真澄の記録からその存在を確認できる。菅江真澄は寛政9～11年（1797～1799）にかけて，津軽藩から薬草調査を依頼され，岩木山や白神山地等の領内の山野に入っていた。その中で彼は，寛政10年（1798）6月2日に，「十腰内観世音」，現在の巌鬼山神社から，大石口を登って「赤倉が嶽」，つまり巌鬼山まで登山している。しかも真澄は，「このあないどものいふにまかせて，いかがとためらふほど日は西の梢にかたぶけば」と道を戻して下山している[50]。真澄のこの記述の仕方から，おそらく登山道は岩木山の山頂まで通じていたと推測される。このように，伝承に登場した大石口は，近世でも岩木山に登山することは可能であったと考えられる。

②長平口：では，お山参詣の「古習」がみられたと指摘されてきた長平口は，どうであったのだろうか。前出の「小沢分帳」において，長平口経路付近は，現在の北津軽郡板柳町周辺村落の利用場所に定められており，大石口と同様，長平口もこの地区に入るために利用されていたと推測される。

聞き取りを基にした民俗資料では，長平からの参詣が記録されている。例えば，西津軽郡鰺ヶ沢町種里の事例では，「種里では長平口から登拝するが山カケに行く男は，赤石川で一週間コリをとる。男は宿に集まり，夜，氏神の八幡神社にまいってから出発する（長平からの登拝は本来，九日山といって二十九日と決まっていた)。」[51]とある。しかしこれは，資料的にみて近代以降の状況を示すものであり，同じ種里でも近世の参詣記録では，これとは異なっている。種里八幡宮宮司の日記『永宝日記』・『年中日記』によれば，「岩木山参詣人百人計登山のよし。百沢も無覚珍事に候」・

「岩木山参ハ此辺相応ニ参，近年無覚ニ候。氏子中百廿人計ニ御座候。廿八日ニ百沢迄参朝登山のよし」[52]，「岩木山参詣相応之由産子中于八九十人参候 百沢も相応之参詣之由」[53]等とある。明らかに，長平ではなく百沢から参詣している様子が窺える。したがって，近世には，百沢口を参詣登山道に使用しており，長平口は使用されていなかったと考えられる[54]。

しかし近世末期，長平口は中世以前の古い登山道であるという認識が存在した可能性はある。現在の長平口は，近世前期以降に確認される長平村[55]を基点として，岩木山を北西麓から登る道であり，途中に西法寺森(1288m)という峰を経由する。この地名は，巌鬼山別当寺の西方寺観音院との関連を想像させるが，文書史料には寛政3年（1797）の「小沢分帳」に初めて登場するものである[56]。また「小沢分帳」では，長平を「永平」と記載しており，これも鳥海山別当寺の永平寺景光院を意識した地名と推測される[57]。しかも，長平・中村家の『先祖勇書目録』によれば，「永平村之元永平寺・西法寺弐ヶ寺有之岩木山登山致，其後同所于沢数百こへ百沢寺御建，村名ハ百沢村ト名付登山致，永平村之儀ハち（つ）ぶれ村ニ相成」[58]と別当寺が長平に存在しており，岩木山に登山していたとしている。無論この言説は，前述した縁起伝承には登場せず，上記の由緒書等の形で，近世末期に創作されたものであろう。しかし，少なくともこの時期には，長平口は「古道」[59]であるという言説が形成されており，このことが，後述する明治6年（1873）の長平口開通の背景となったと推測される。

以上のように，近世における百沢口以外の大石口や長平口等の登山道は，雨乞いなどに使用されたり「古道」として認識されてはいたものの，百沢口のようなお山参詣に使用される参詣登山道ではなく，入会地利用のための道であった。近代の伝承に「此の口（大石口）は遠く古昔に拓きし処なるも百年以前に一旦禁止せられしものなり」[60]という話が残されている。これは，大石口を使用することを為政者側，すなわち津軽藩が禁止したことを示唆していると考えられる。さらにいえば，藩の影響下にあった百沢口以外の登山道は認められなかったことをも窺わせている。つまり，これらの登山道が，あくまでインフォーマルな登山道にすぎなかったことを示しているといえる。前出した『和漢三才図会』や図3等において，登山道に百沢口のみが記載され，他のものが記載されていないのも，こうした事情が影響したのであろう。

Ⅳ．近代の登山道

(1) 神仏分離と岩木山の再編

近代になると，岩木山信仰をめぐる状況は，神仏分離令に伴って大きく変化する。津軽地方で神仏分離が実行されたのは，明治2年（1869）からであった[61]。当然，岩木山も例外ではなく，それまで岩木山別当の権威を誇ってきた百沢寺は，明治3年（1870）8月，別当職を罷免された。下居宮は下居神社（岩木山神社）に改正し，堂宇に安置されてきた仏像類は撤去された[62]。同年閏10月になると，社寺俸禄改正に伴い，これまで「境内」と称してきた岩木山全体の所有も取り上げられ，官有地に編入された[63]。そして翌明治4年（1871）7月，同年のお山参詣の直前には，岩木山頂上の祠に御神像を勧請し[64]，さらに廃藩置県後の明治6年（1873）6月には，岩木山神社は国幣小社に列せられ，岩木山は神道化の形態をほぼ整える。それらの変化は，「當社之儀従前他州ハ勿論旧藩人モ祭日（お山参詣）之外ハ容易ニ参拝不相成候」という排他的な状態から，「本県管内ハ申迄モ無之諸方旅人ニ至ル迄平日参拝勝手次第ニ候事」[65]に見られるように，岩木山を民衆に広く開放する結果をもたらした。無論これには，女人禁制廃止（明治5年）[66]による女性の岩木山登山開放も，関連してい

表2　近代の史料における岩木山登山道の記述

史料名（成立・発行年代）	百沢口	長平口	大石口	嶽口	備考
「岩木山神社境内図」（1874）[1]	●	●			
『新撰陸奥国誌』（1876）[2]	◎	○	○		
「明治22年輯製1/20000輯製図」（1889）[3]	●	●			百沢口の記載に誤り有
『弘藩明治一統誌』（1892）[4]	◎	○			旧津軽藩士による歴史書
『大日本地誌』（1904）[5]	○	●			
『弘前風俗画報』（1905）[6]	◎				当時の地元風俗雑誌
『日本山嶽志』（1906）[7]	◎				山岳に対する地誌的ガイドブック
「津軽富士岩木山の話」（1911）[8]	○	○	○		岩木山登山の紀行文
「大正元年測量1/50000地形図」（1912）[9]	●	●	●	●	
『国幣岩木山神社』	○	○	○	○	岩木山神社発行のガイドブック
『青森県総覧』（1928）[11]	○	○		○	当時の県史に該当する文献
『東北の山々』（1933）[12]	○	●	●	○	東北地方の登山ガイドブック

◎はこの登山道がお山参詣に使用されていることを記述しているもの。○はこの登山道のことを記述しているもの。●は絵地図に登山道の記載があるもの。
1)「陸奥国第三大区四小区津軽郡百沢村鎮座国幣小社岩木山神社境内図」，本文注72）①。2)『新撰陸奥国誌』岩木山条・厳鬼山神社条・西法寺蹟条，本文注14）481～480頁・本文注17）32・115頁。3)『幕末・明治 日本国勢地図』，本文注72）②。4)『弘藩明治一統誌5 社寺院雑報録全』別当職社務ノ事条，本文注70）②。5)『大日本地誌2』，本文注72）③58・59・774～775頁。6)「お山参詣」弘前風俗画報1，明治38年（1905），13～15頁。7）高頭　式編『日本山嶽志』，博文館，明治39年（1906）（日本山岳会編『日本山嶽志（復刻版）』，大修館書店，1975），28頁。8）山本徳三郎「津軽富士岩木山の話」，山岳6-1，明治44年（1911），168～174頁。9)「岩木山周辺図」，図2注1)。10）岩木山神社社務所編『国幣岩木山神社』，大正13年（1924），33～36頁。11)『青森県総覧　青森県四十年略史』，東奥日報社，昭和3年（1928），981頁。12）安斎　徹『東北の山々』，朋文堂，昭和8年（1933），176～184頁。

ると考えられる。

(2)　お山参詣習俗の変化

この変化に伴い，お山参詣の習俗自体も影響を受けた。現在，お山参詣の伝統的習俗とされるもののなかには，近世の参詣習俗とは異なる部分がみられるが，それらの多くは，この岩木山信仰の再編期に変化したと推定される。この変化は，基本的には岩木山神道化によるものであったが[67]，実際の主導的役割を果たしたのは民衆であった。神社などが通達した参詣時期の新暦9月1日への変更[68]や，参詣時におけるかけ声の神道風への変更[69]を，民衆が受け入れず，近世の状態を存続させたことからも，彼らの影響力を知ることができる。たびたび華美を慎むべしとの触書がだされる等，厳しく管理されてきた近世に比べれば，近代の開放的な岩木山の状況下では，彼らの意志が反映されやすくなったのであろう。いずれにしろこの結果，1週間の潔斎の後，旧暦8月1日前日までに白浄衣に大御幣や大幟，五穀の供物等を持ち[70]，登山囃子を演奏しつつ百沢の岩木山神社に参詣し，1日未明に登山して御来光を山頂で迎えるという，民俗誌でよく語られる「伝統的お山参詣」の基礎が形成されたと考えられる。

(3)　登山道の多様化

このように岩木山やお山参詣習俗は大きく変化したが，里宮が鎮座していた百沢口は，依然として岩木山の主要登山道であり続けた。それは，岩木山を紹介した近代の文献に，登山道として必ず百沢口が記されていることからも確認できる（表2）。一方，長平口や大石口等の登山道は，以下で述べるように近代に整備された。

①長平口：近代の長平口は，明治6年（1873）からはじまる。種里八幡宮宮司の日記『年中日記』は，「岩木山神社今般長平村于古道伐開近在同所于参詣致候様御布告ニ候同所于参詣

人千人程登候由」[71]と長平口開通を伝えている。長平口を「古道」と記していることから，前述した通り長平口を中世以前の登山道とする認識があったと推察される。いずれにしろ長平口は神社側の指示によって開かれ，ここから参詣するようにとの布告が長平近在地域に出されることによって百沢口と同レベルの参詣登山道になったのである。このことは，明治中期頃までの岩木山を描いた絵図や地図類に，百沢口と長平口の2つの登山道が記載されていることからも確認できる（図4）[72]。明治6年は，岩木山神社が国幣小社に列せられ，岩木山の宗教的再編がほぼ完了した年である。この時期に長平口が開かれたということは，これも岩木山信仰の再編に関連した事象と捉えることができる。また長平口の開通には，長平村の存在も関係している。お山参詣では，宿泊等の世話をする御師が存在しないため，参詣時の休息・宿泊の場として農家を使用していた[73]。この点において，百沢口同様に，麓に集落があった長平口は，お山参詣時の登山道としては適当であったと考えられる[74]。

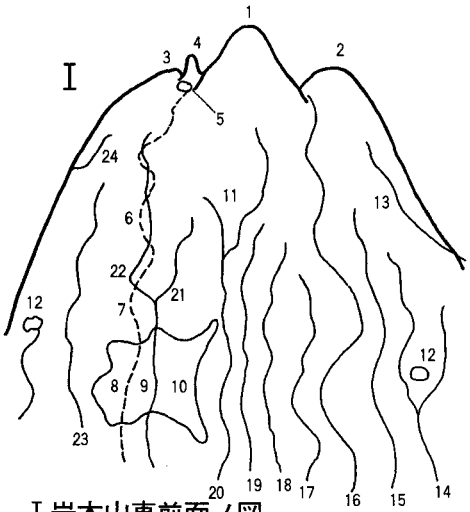
ただし図1にあるように，長平口が西北津軽地方の民衆に広く利用されるには相当の時間がかかったと思われる。明治9年(1876)の『新撰陸奥国誌』には，百沢村が「毎年に七月二十五日より八月十五日まで岩木山神社参詣のものを宿し」[75]と記されている。しかし長平村には，長平口の記述があるにもかかわらず，百沢村のように「参詣のものを宿し」という記述はない[76]。また当時の長平口は「ところによっては張縄にたよって」[77]登らなければならないような険しい道であった。さらに，それまで百沢口を使用していた民衆にとって，長平口への変更は抵抗があったかもしれない。結局，長平口からの参詣が定着するのは，改修工事[78]が行われた明治18～20年(1885～87)以降と考えられる。明治26年(1893)，西津軽郡木造村のお山参詣に関した新聞記事で，「従来中津軽郡岩木村大字百沢より登山すること」になっていたものが，「西津軽郡中村大字長平の新道開通えて以来過半は同処より登山」[79]するようになったと記されていることも，それを示唆しているといえよう。

②大石口：前述のように，大石口の通る赤倉沢周辺は，近世に雨乞いの場所として文書に登場していたが，近代初期においても祈禱は行われていた[80]。しかし，雨乞いの場所という認識は，現在ではほとんど確認できず，近代以降徐々に廃れていったようである[81]。一方，鬼神が棲息するという赤倉の異界としてのイメージは，近代以降も失われることはなかった。それどころか，赤倉の異界性は，近代から現代にかけて，より強化されていった観がある。これには，前述したカミサマ系宗教者の存在が影響している。

近代以降，彼らは自らの修行の場所として赤倉を利用しはじめ，昭和初期頃に，赤倉に修行用の堂や小屋等が造られるまでに至った[82]。彼らを通じて，赤倉の鬼神への信仰は，次第に津軽の民衆に広まり[83]，岩木山信仰の一翼をになう宗教的勢力に成長していった。それは，まさに赤倉信仰と呼ぶにふさわしい状況になったといえる。

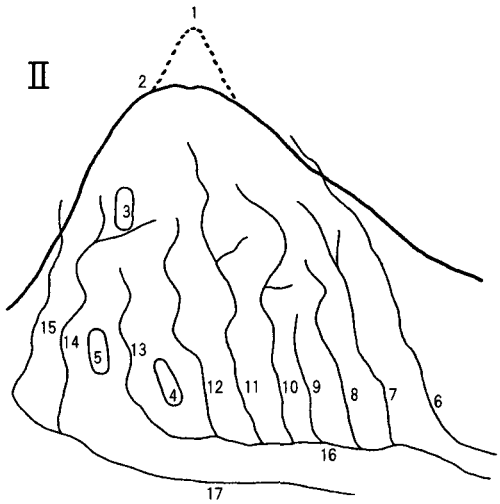
彼らのような宗教者は，近世の五所川原の豪農の日記に「禁厭（マジマイ）」上手の「霊夢（ゴムソウ）」が信仰されたと記されていることから[84]，近代以前から存在していたと考えられる。しかし，彼らと岩木山や赤倉との関係が確認されるのは，近世ではなく近代に入ってからである[85]。また彼らは，岩木山以外の様々な神仏を信仰する特徴があり，中には岩木山や赤倉とあまり関係しないカミサマすら存在する[86]。したがって，カミサマ達の赤倉での活動を，近代以前から継続してきた岩木山信仰の一部として捉えるには，疑問の余地が残される。

そのような赤倉から岩木山頂に至る大石口が開かれたのは，長平口より30年ほど遅い明治34年（1901）のことである。登山道を整備したのは，赤倉の鬼神を祭る鬼神社の鎮座す



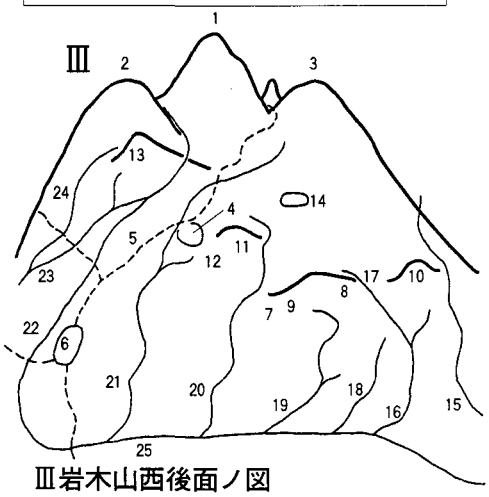
Ⅰ岩木山東前面ノ図

1岩木山	2巌木山	3鳥海山
4御蔵石	5種蒔苗代	6行者道
7箸立	8百沢	9救聞持堂
10高岡	11大マブ	12清水
13八ツ森沢	14小杉沢	15滝ノ沢
16大黒沢	17壁倉沢	18一本木沢
19板ハシ沢	20後ロ長根ノ沢	21寺沢
22清水沢	23蔵助沢	24毒蛇沢



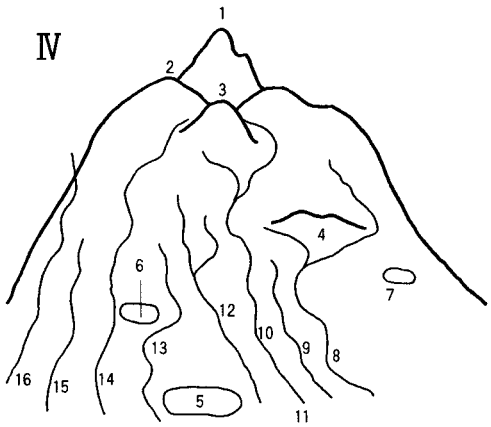
Ⅱ岩木山南向ノ図

1岩木山	2鳥海山	3硫黄平
4崇湯小ヤ	5湯段	6毒蛇沢
7滝ノ沢	8鍋形沢	9大平沢
10平沢	11柴カラ沢	12砥上ヶ沢
13湯ノ沢	14湯段ノ沢	15黒沢
16岩木川水上		
17田代川目屋ノ沢川岩木川水上		



Ⅲ岩木山西後面ノ図

1岩木山	2巌木山	3鳥海山
4姥石	5行者道	6永平村
7永平寺跡	8景光院林	9若木ノ森
10抗子森	11二ツ森	12追子ノ森
13鍋森	14細沼	15黒沢
16船打沢	17森合沢	18寒水沢
19門尻沢	20赤沢	21苗代沢
22大白沢	23小白沢	24柴沢
25中村川上水	26二ノ御坂ヘテル	



Ⅳ岩木山北面ノ図

1岩木山	2巌木山	3赤倉
4西方寺跡	5十腰内観音	6大石
7黒坊沼	8鱒ノ沢	9徳明沢
10大鳴沢	11浮田川	12長前沢
13白狐沢	14赤倉沢	15カレイ沢
16八ツ森沢		

図4　『弘藩明治一統誌　社寺院雑報録　全』における岩木山図

注）本文注70)②岩木山ノ事条をもとに筆者が作成

る中津軽郡裾野村鬼沢（現・弘前市鬼沢）の人々であった[87]。大石口がいかなる経緯で開かれたのかは定かではないが，これによって「北郡方面より登山する人の便宜一方ならず」[88]と記されるように，北津軽郡の地域，特に鶴田町・五所川原市周辺からの参詣者にとっては，岩木山に最短距離で登山することが可能になった。

しかし図1からも確認できるように，この大石口は，長平口ほどには参詣者に定着しなかった。明治末期頃のお山参詣を記した新聞記事に，「登山者の七分は百沢口三分は長平口の割合にして大石口は全登山者の二十分の一位に過ぎざるの観あり」[89]とあるように，大石口はほとんど使用されていなかった。その原因として，大石口が「普く登山者に知れ渡らず」[90]と，その存在自体が知られていない点があげらている。これは，岩木山神社による長平口の開設とは異なり，大石口が鬼沢の村人達による，ある意味で私的な開通であったことによるものと考えられる。また，前述した赤倉の異界としてのイメージも影響していたであろう。赤倉に棲むという鬼神は，農民たちを助ける善神だけでなく，登山最中に参詣者を怪異現象に巻き込む恐るべき存在でもあった。そのような場所を通る大石口をあえて選択する者は，多くはなかったであろう。そしてなにより大石口には，百沢口や長平口のように参詣者が休息・宿泊可能な農家等のある集落が近辺になかったことも，利用度が低かった理由の1つであろう[91]。

結局大石口は，お山参詣よりも修行等を行うカミサマ系宗教者やその信者達に主に使用される登山道になったと考えられる。

③嶽口：嶽口は，岩木山の南西麓にある嶽温泉からの登山道である。嶽温泉は近世前期から確認され，津軽の湯治場の1つになっていた[92]。この嶽温泉から菅江真澄が，寛政10年（1798）5月27日，やはり薬草調査のために，硫黄や熱水等が噴出していた中腹の硫黄平と呼ばれる場所まで登山していた[93]。一方，民俗資料では，嶽温泉周辺村落がお山参詣時に嶽口を利用していたことになっている（図1）。このことから，大石口や長平口等のように，嶽口も近世からインフォーマルな登山道として機能し，近代以降に整備され参詣に使用されるようになったと考えられるが，史料的には確認できない。ただし，大正元年（1912）測量の地形図（図2）に嶽口が記載されており，また明治42年（1909）8月には弘前女学校の学生が嶽温泉から岩木山に登山していることから[94]，おそらく明治末期頃には嶽口が利用されるようになったと考えられる。とはいえ嶽口は，津軽の平野部から遠く離れた山間部に位置しており，お山参詣では近隣の地域のみの利用にとどまった。むしろこの登山道は，麓に温泉があったこともあってか，観光用の登山道としての性格が強かったようである[95]。

このように，百沢口以外の登山道はいずれも近代以降に整備されたものであり，それぞれお山参詣に利用された。図1にある登山道の状況は，実はこの時期以降の状態であったのである。それまでインフォーマルな道でしかなかったものが，お山参詣時に利用されるようになったのは，やはり近世の百沢寺や津軽藩の影響力が取り除かれ，岩木山がより開放的になったためと考えられる。

だがそれでも，本来の参詣登山道は百沢口のみであるというような認識は根強かったと考えられる。それは，上りと下りに使用する登山道の変化から窺える。前出の西津軽郡木造村のお山参詣に関した新聞記事には「同処（長平）より登山して更に百沢に降りることとなりし」[96]とあり，登り口は長平口であるが，下り口は百沢口を使用していたことがわかる。こうした事例は，長平口・大石口・嶽口を登り口に使用した地域の中にも多くみられ[97]，下り口が百沢口に集中した傾向があることが確認される。ところが，「長平から百沢，あるいは百沢から長平というような登り降り

は，かけぬけといって忌まれていて，普通にはやらない」[98]とあるように，上り口・下り口を違えてはならないという伝承も，一方では存在していたのである[99]。こうした矛盾した語りは，登山道が百沢口のみであり，上り口・下り口を変えること自体が考えられなかった近世とは異なり，近代には参詣登山道が複数になった状況によって形成されたものと考えられる。つまり，長平口等の登山道が整備され，上記のような上り・下りを違える参詣パターンが発生してきた結果，逆に上り・下りを違えることは，それまでの慣習に反するのでよくないというような伝承が成立してきたと解釈されるのである。

その意味では，百沢口以外の参詣は，完全には定着しなかったともいえる。戦後になると，長平口からの参詣はほとんど途絶えてしまう。これには長平へのアクセスの悪さや百沢におけるお山参詣のより一層の祝祭化等の理由が挙げられるだろうが，一方で，これら長平口等からの参詣の歴史が浅かったために，参詣者に軽んじられたとも推測される。参詣する登山道がいくつになっても，やはり本道は百沢口であり，その他の登山道は便宜的に使用する程度のものにすぎなかったと考えられる。

V．おわりに

以上，岩木山信仰において語られてきた「通説」等への検証のため，岩木山の登山道の変遷について，中世以前から近代にかけて考察してきた。本稿の内容を要約すれば，次の通りである。

①開山縁起によれば，中世以前，岩木山の里宮・別当寺は十腰内を中心にした北麓に存在し，そこから参詣登山していたが，その経路上，鬼神による怪異現象が頻発した。この現象が，鬼神の棲む赤倉において発生したことから，当時の登山道は赤倉沢や巌鬼山を通過する大石口と推定される。その後，怪異現象の起こる大石口を避けるため，南麓の百沢に里宮等は遷宮し，参詣登山道も百沢口に変化した。そして，北麓の別当寺等は退転し，大石口も使用されなくなった。

②近世になると，岩木山は津軽藩の影響下に入り，津軽の「総鎮守」に位置づけられる。現在も行われるお山参詣習俗も，近世前期より確認されている。しかし，近世の参詣登山道は，里宮のあった百沢口のみであり，大石口や長平口は，お山参詣に使用されることはなく，山麓の入会地的利用のためのインフォーマルな道の1つとして機能していたと推定される。ただし，大石口の経路上の赤倉沢を中心にした一帯は，縁起に登場する鬼神の伝承によって異界と畏敬され，雨乞い祈禱の場所にもなっていた。また長平口は，近世末期，中世以前からの「古道」であるという認識が成立していた。

③近代の岩木山は，神仏分離により神道化し，同時に近世の排他的な支配体制も崩壊した。お山参詣もその影響を受けて習俗を変化させた。カミサマ系宗教者は，この時期に赤倉を拠点とするようになり，「裏」の岩木山信仰をになう勢力が形成された。一方，長平口や大石口・嶽口の登山道が整備され，お山参詣に利用されるようになり，近世には百沢口のみであった参詣登山道が複数化した。この結果，民俗資料に記述されるような「伝統的な」お山参詣習俗が形成されてきた。しかし百沢口を主要登山道であるとする認識は，依然として根強かった。

以上をふまえ，これまでの研究において繰り返し指摘されてきた長平口の「古習」と，赤倉信仰に岩木山信仰の祖型を想定する「通説」の妥当性について検討したい。まず長平口に残存したとされるお山参詣の「古習」についてであるが，これは限定的に考えなければならない。つまり，長平口からの参詣に「古習」が残存しているとした主張が仮に事実としても，それは決して近世から継続してきた

ものではない。長平口自体は明治6年（1873）以降，参詣に使用されるようになるが，昭和30年頃（1955）には使われなくなる。すなわち，約80年間しか参詣に使用されなかったのである。

次に，赤倉信仰に岩木山信仰の祖型を想定する「通説」について検討する。縁起伝承では，里宮が最初に北麓の十腰内に創建されたこと，大石口経路上の巌鬼山や赤倉沢付近に岩木山に先住した鬼神が棲んでいたこと等が記されていることから，この周辺が，南麓の百沢より歴史が先行していたことが確認できる。しかも近世において，この鬼神伝承はなお存在し，実際に赤倉が雨乞いの場所になっていた。したがって，これらを岩木山信仰の祖型とするのは妥当であろう。だが，カミサマ系宗教者の活動を，上記の信仰と連続して捉えるのは無理がある。彼らの赤倉での活動は，あくまで近代以降なのであり，近世以前に彼らと岩木山や赤倉との直接的関連が確認できない以上，近世以前の信仰とは分けて考えるべきであろう。

さて最後に，第二次大戦後の岩木山の変貌について，簡単に触れたい。戦後の岩木山では，昭和30年代に弥生口や大平口等の新たな登山道の開設がみられたものの[100]，お山参詣にはほとんど利用されることはなかった。この頃のお山参詣は，モータリゼーションの影響により，道路の整備された百沢口に集中する傾向が顕著になり，北麓の長平口からの参詣はほとんど途絶えた[101]。そして1965年（昭和40）8月25日（旧暦7月28日），嶽温泉西方より嶽口8合目までの自動車道，津軽岩木スカイラインがお山参詣時期に合わせて開通し，お山参詣の状況は一変した。それは単に，それまでの百沢口に代わって，スカイラインを利用した参詣になったことに留まらず，むしろ旧暦7月29・30日に賑わいをみせる祝祭的な百沢への「下参り」と，旧8月1日朝にピークを迎える岩木山頂への登拝習俗とが事実上，分化する事態を発生させた[102]。一方，赤倉では，カミサマ系宗教者達の堂社が次々に立ち並び，宗教集落的な景観を呈するまでになっている[103]。以上のように，戦後の岩木山は大きく変動しているが，本稿では，これまでの諸研究の検証に重点をおいたため，これらの動向を割愛せざるを得なかった。今後は，このような現代社会の中で，刻々と変化を続ける岩木山信仰について考えていきたい。

（関西学院大学・大学院研究員）

〔付記〕
本稿をまとめるにあたり，御指導いただいた関西学院大学地理学研究室の先生方，御助言してくださった院生諸氏にそれぞれ感謝いたします。なお，本稿の骨子は，1997年度人文地理学会大会（於・大阪市立大学）において発表した。

〔注〕

1) 主なものだけでも以下の文献がある。①柳川啓一「岩木山まいり」，社会と伝承2-4，1958，1～6頁。②森山泰太郎『郷土を科学する1　津軽の民俗』，陸奥新報社，1965，163～164頁。③宮田　登「岩木山信仰－その信仰圏をめぐって－」（和歌森太郎編『津軽の民俗』，吉川弘文館，1970），277～295頁。

2) 金子直樹「岩木山信仰の空間構造－その信仰圏を中心にして－」，人文地理49-4，1997，1～20頁。

3) 宮田論文，前掲注1）③279頁。

4) 小山隆秀「模擬山習俗からみた岩木山信仰－信仰圏の設定をめぐって－」，日本民俗学203，1995，15頁。

5) これは森山の「ことに長平口，大石口の登山路からくる参詣者には，まだ古習がうかがえるといわれる」という記述を基にして使用する。森山著書，前掲注1）②159頁。

6) これは，柳川が最初に指摘した以後，繰り返し指摘されている。①柳川論文，前掲注1）①3頁。②森山著書，前掲注1）②163～164頁。③宮田論文，前掲注1）③279頁。④小山論文，前掲注4）15頁。

7) 主なものだけでも以下の文献がある。①江田絹子「津軽のゴミソ」（和歌森太郎編『津軽の民

俗』，吉川弘文館，1970)，331～346頁。②楠　正弘「日本的シャマニズムの展開－赤倉沢と恐山山」，季刊現代宗教1-1，1975，115～150頁。③池上良正「津軽赤倉信仰覚書－ゴミソ系カミサマの活動を中心に－」，文経論叢（弘前大学）19-3，1984，1～39頁。④池上良正「修行堂から神社へ－津軽赤倉信仰における「教団化」の事例－」，文経論叢(弘前大学)21-3，1996，1～44頁。

8)　これは，楠が最初に指摘し池上が継承発展させた以後，繰り返し指摘されている。①楠論文，前掲注7）②144頁。②池上良正「岩木山信仰の近世的淵源」(長谷川成一編『津軽藩の基礎的研究』，国書刊行会，1984)，581～583頁。③池上論文，前掲注7)③3～4頁。④小山論文，前掲注4）5頁。

9)　例えば池上は，近世における鬼神伝承や，それとの関係をうかがわせる怪奇談や「光物」等によって確認される岩木山や赤倉の聖地性が，カミサマに代表される現在の赤倉信仰に継承されていったとしている。しかし近世の赤倉で，いかなる宗教的活動が実際に行われていたのかという点については，ほとんど触れていない。池上論文，前掲注8）②602～611頁。

10)　例えば①有賀密夫「富士山を中心とする山麓信仰集落」，地域研究21，1974，12～25頁，②岩鼻通明「出羽三山をめぐる山岳宗教集落」，地理学評論56-8，1983，535～552頁，④岩鼻通明「道中記にみる出羽三山参詣の旅」，歴史地理学139，1987，1～14頁，⑤小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷—関東地方からの場合—」，人文地理学研究XIV，1990，231～255頁などがあげられる。

11)　百沢寺十世朝祐『別当寺光明院元禄書上　岩木山光明院百沢寺』，元禄14年(1701)（神道大系編纂会編『神道大系　神社編27』，1984)，466～467頁。以下，『岩木山光明院百沢寺』と略記。

12)　池上論文，前掲注8)②595頁。ただし，岩木山神社にある釣灯籠には永正14年（1517）8月1日に寄進された銘があり，中世以前から8月1日に祭礼が行われていた可能性はある。品川弥千江『岩木山』，東奥日報社，1968，81頁。

13)　菅江真澄『津可呂の奥』寛政8年（1796）3月1日条（内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集3』，未来社，1972)，64頁。

14)　岸　俊武編『新撰陸奥国誌』宝泉院条，明治9年（1876）（青森県文化財保護協会編『新撰陸奥国誌2（みちのく双書16)』，1965)，320頁。

15)　『岩木山光明院百沢寺』，前掲注11）466頁。

16)　菅江真澄『外浜奇勝』寛政9年（1797）6月2日条（内田武志・宮本常一共編『菅江真澄全集3』，未来社，1972)，178～180頁。

17)　岸　俊武編『新撰陸奥国誌』巖鬼山神社条，明治9年（1876）（青森県文化財保護協会編『新撰陸奥国誌3（みちのく双書17)』，1965)，32頁。ただし『新撰陸奥国誌』では，さらに「北に向ふ山径なれば海風非常にして秋霖すれは道滑に或雨後多勢にて山磴を陟れは嵒壁臂崩れ患ありて怪我もせしなるへけれとも今の百沢寺口は南向し陽光を受け道千き滑沢蹈転の難鮮きより自と皆この路より登ることとなりて他の道は廃せしなるへし」としている。この説は，北麓の風雨による危険性を強調することにより，実際には緩やかな大石口が，遷宮伝承に登場する古い登山道であることを示唆していると考えられるが，伝承世界と現存する登山道の状態を，強引に整合させたきらいがあることが否めない。

18)　品川著書，前掲注12）170頁。

19)　『岩木山光明院百沢寺』，前掲注11）466頁。

20)　『新撰陸奥国誌』百沢寺条，前掲注14）472頁。

21)　『津可呂の奥』，前掲注13）64-65頁・『新撰陸奥国誌』百沢寺条，前掲注14）472頁。

22)　寛政9年（1797），弘前市立図書館岩見文庫蔵。

23)　一方，松代集落にはかつて薬師堂と呼ばれた久須志神社がある。これは，貞享4年(1687)の「御検知水帳」に「薬師堂地」と記載されており，しかも「百沢寺抱」となっている。①鰺ヶ沢町史編さん委員会編『鰺ヶ沢町史1』，鰺ヶ沢町，1984，562頁。安政2年（1855）の「神社微細調」では，この堂の草創年月は不詳とされているが，縁起伝承では，鳥海山の本地仏は薬師如来とされており，永平寺との関連が推測される。②中村良之進『青森県中津軽郡岩木村郷土史』嶽賜尋常小学校，1930，161頁。

24)　ただし，縁起伝承には「左峯巖鬼山」や「右峯鳥海山」等と，岩木山を百沢からではなく，北西麓の長平や松代方面から望む視点で記載されている部分があり，この地区が十腰内と同様

に，百沢に先行した地区であった可能性は残る。『岩木山光明院百沢寺』，前掲注11)465-466頁。

25) その代表的な施策として，弘前築城に伴い領内の主要寺社を弘前城下に移転集中させたことがあげられる。小舘衷三『津軽藩政時代に於ける生活と宗教』，津軽書房，1973，171～176頁。

26) 『津軽一統志』首巻 岩木山条，享保16年(1731)(新編青森県叢書刊行会編『津軽一統志(新編青森県叢書1)』，歴史図書社，1974)，8頁。

27) 『岩木山光明院百沢寺』，前掲注11) 467頁。

28) 『青森県史1』貞享3年 (1686) 12月条・4年(1687) 8月条，青森県，1926，899・903～909頁。

29) 『岩木山光明院百沢寺』，前掲注11) 469頁。

30) 『青森県史1』寛永3年 (1626) 4月条，前掲注28) 328～329頁。

31) 池上論文，前掲注8) ②583～590頁。

32) 『弘前藩庁日記 国日記』貞享元年 (1684) 7月19日条，弘前市立図書館蔵。

33) 触書は例えば，「岩木山登山之儀ニ付度々被仰付も有之候通 目立候花美之衣類並幡幣束等迄大振ニ無之様 其外惣而異城相好無之費ニ不致候様 猶亦帰之節人家江大勢入込踊立或者途中往来之見物人江悪徒等致候旨相聞得候 不埒之至り候 己来決而右躰心得違無之様能々申付置候 被仰付候 此旨厳重可被申付候」というものであり，派手な服装等をして無駄に出費し，帰りがけに他人に悪事をおこす者がいるようなので，今後このようなことがないようにと通達している。『嘉永六癸丑年御用留(御代官所)』安政元 (1854) 年閏7月8日条 (豊島勝蔵解読『津軽新田記録5』，1991)，36～37頁。

34) 寺島良安『和漢三才図会』岩城山権現条，正徳5年(1715) (神道大系編纂会編『神道大系 神社編27』，1984)，466頁。

35) 比良野貞彦『奥民図彙』，天明年間(1781～1789)(宮本常一・原口虎雄・谷川健一共編『日本庶民生活史料集成10』，三一書房，1970)，257・264頁。

36) この絵図の正確な作成年代は不明である。しかしここには，下居宮を，『津軽一統志』に「百沢御宮惣費用貞享年中迄金拾八萬三千両」と記載しているのと同じ「百沢御宮」という名称で記していること，また同様に，現在の巌鬼山神社を，菅江真澄が「十腰内観世音」と記したのとほぼ同じ「十腰内観音」という名称で記していること，さらにこれらの図に，「小沢分帳」に記されている多数の沢が記載されていること等から判断して，おそらく近世末期頃の絵図と推定される。①『津軽一統志』首巻 岩木山条，前掲注26) 22頁，②『外浜奇勝』，前期注16) 177頁。③「小沢分帳」，前期注22)。

37) 「小沢分帳」，前掲注22)。

38) ただし，「小沢分帳」における岩木山麓の利用状況は，近代のそれとは異なっている。その変遷については，以下の文献を参照。宮下利三『岩木山麓の採草地について』，弘前市政調査会，1956，162頁。

39) 『新撰陸奥国誌』西法寺蹟条，前掲注17)115頁。

40) 「小沢分帳」，前掲注22)。

41) 『津軽一統志』首巻 岩木山条，前掲注26) 9頁。

42) 平尾魯仙『谷の響』山霊条 (青森県立図書館編『青森県立図書館郷土双書1』，1969)，59～60頁。

43) ただし津軽藩は，天候不順の時，お山参詣延期や嶽温泉入湯禁止に加え，岩木山中に不浄の者がいるのではと捜索の触書等を発している。このことから津軽藩は，赤倉にとどまらず，岩木山全体を畏敬すべき聖地として認識していたと考えられる。黒瀧十二郎「津軽領嶽温泉と岩木山信仰」，國史研究98，1995，38頁。

44) 楠論文，前掲注7) ②144頁。

45) 池上論文，前掲注7) ③6頁

46) 『新撰陸奥国誌』宝泉院条，前掲注14) 320頁。

47) 『津軽歴代記類』信著公条，明治10年(1877)(青森県文化財保護協会編『津軽歴代記類(上)(みちのく双書7)』，1959)，200頁。

48) 『山一金木屋又三郎日記』嘉永6年 (1853) 6月12日条 (斎藤昭一解読・編『山一金木屋又三郎日記抜粋編』，青研，1995)，25頁。

49) 他に西津軽郡鰺ヶ沢町種里の記録でも「四月中旬より五月上旬まで雨一切降不申候旱魃ニ御座候 (中略) 雨乞ノ者毎日二百人ツツ赤倉へ参候由」とある。『永宝日記』文化10年 (1813) 条(青森県文化財保護協会編『永宝日記・万覚帳(みちのく双書35)』，1982)，12頁。

50) 『外浜奇勝』，前掲注16) 178～180頁。

51) 酒向伸行「岩木山修験と津軽為信」『山椒太夫伝説の研究－安寿・厨子王伝承から説経節・森鴎外まで－』，名著出版，1992，79頁。

52) 『永宝日記』文化10年（1813）条・嘉永6年（1853）条，前掲注49）13・177頁。

53) 『年中日記』慶応3年（1867）条（桜井冬樹解読刻字『年中日記』，1980），21頁。

54) 同様に西津軽郡森田村においても，民俗資料に長平参詣が記述されているが，近世の豪農の日記には，百沢参詣を行っていたことが記されている。①森田尋常高等小学校郷土調査部編「郷土調査」いしがみ8，1997，89頁。②『萬覚帳』慶應3（1867）年8月条（青森県文化財保護協会編『永宝日記・万覚帳（みちのく双書35）』，1982），318頁。

55) 『青森県史1』寛文3年（1663）4月12日条，前掲注28）137～138頁。

56) 「一 西法寺森于下小沢平 藤崎組辻村 深味村 飯田村 林崎村 赤田組赤田村 板屋野木村 灰沼村 福野田村」と記載されている。「小沢分帳」，前掲注22)。

57) 「一 白沢江入来ル村々 赤石組芦萢村 永平村」と記載されている。「小沢分帳」，前掲注22)。

58) 『先祖勇書目録』，文久2年(1862)，『鰺ヶ沢町史1』，前掲注23）①555頁。

59) 『年中日記』明治6年（1873）条，前掲注53）55頁。

60) 『東奥日報』明治42年（1909）9月18日，青森県立図書館蔵マイクロフィルム。以下，『東奥日報』からの引用はすべてこのマイクロフィルムによる。

61) 田中秀和「近代神社制度の成立過程－津軽地方の神仏分離と神社改正－」（長谷川成一編『北奥地域史の研究－北からの視点－』，名著出版，1988），313～352頁。

62) 『公私留記（弘前八幡宮）』明治3年（1870）8月22日条，弘前大学図書館蔵。

63) 『公私留記（弘前八幡宮）』明治3年（1870）閏10月条，前掲注62)。

64) 『御用留（弘前八幡宮）』明治4年（1871）7月条，弘前大学図書館蔵。

65) 『青森県史7』明治7年（1874）7月条，青森県，1926，137～138頁。

66) 品川著書，前掲注12）155頁。

67) 例えば，参詣時の装束が紅染の装束から白浄衣に変わったことや，持参する幟に，神仏習合的な名称であった「岩木山大権現」と書かれていたものを「岩木山神社」と書くようになったこと等があげられる。

68) 参詣時期の変更は，明治7年（1873）に通達された。『青森県史7』，前掲注65）119～120頁。明治6年の新暦（太陽暦）実施に伴い，旧暦（太陰暦）8月1日前後に行われてきたお山参詣を，新暦に合わせ1ヶ月遅れの9月1日に変更しようとしたものだったが，長続きせず旧暦に戻されたようである。おそらく，新暦に従わずに旧暦8月1日前後で参詣を続ける民衆が多かったことが影響したと考えられる。

69) 神道風のかけ声の通達は，明治4年（1871）7月に出された。『木村日記』明治4年7月15日条（平賀町誌編さん委員会編『平賀町誌 下巻』，平賀町，1985），989頁。しかし結局，参詣者には定着せず，それまでの修験風のものが存続した。福士貞蔵編『郷土史料異聞珍談』，津軽考古学会，1954，7頁。

70) 近世まで民衆の献納は認められていなかったが，明治7年に許可されたことで，奉納物が増加したとという。その中で，幟や御幣は神社境内に飾られたことから，人目を引くために，大型化していったようである。御幣を紙ではなく，木を細長く削ったものを使用するようになったのも近代以降である。以上，①『青森県史7』，前掲注 65）137～138頁，②内藤官八郎『弘藩明治一統誌5 社寺院雑報録全』別当職社務ノ事条，明治25年頃(1892)，国立史料館蔵（青森県立図書館編『社寺院雑報録（青森県立図書館郷土双書22）』，1983）による。

71) 『年中日記』明治6年（1873）条，前掲注53）55頁。

72) 図4以外にも絵図では，明治7年頃(1874)の「陸奥国第三大区四小区津軽郡百沢村鎮座国幣小社岩木山神社境内図」に百沢口と長平口が記載されている。①成田末五郎『岩木町誌』，岩木町，1972，126～127頁。また地図では，明治22年(1889)の20万分の1輯製図「青森」・「弘前」や，『大日本地誌』にある「岩木火山之図」においても，百沢口と長平口が記載されている。②『幕末・明治 日本国勢地図』，柏書房，1983，58～59頁。③山崎直方・佐藤伝蔵編『大日本地誌2』，博文館，明治37年（1904），119頁。

73) 弘前市教育委員会偏『弘前の文化財（お山参

詣)』，1982，15頁。

74) ただし長平口では，図2でもわかるように，姥石や永平寺跡とされる場所で山麓の道が合流しており，この付近（当時は草原であった）に参詣者が小屋掛けをすることもあったようである。酒向論文，前掲注51）80頁。

75) 『新撰陸奥国誌』百沢村条，前掲注14）461頁。

76) 『新撰陸奥国誌』長平村条，前掲注17）114頁。

77) 鰺ヶ沢町史編さん委員会編『鰺ヶ沢町史2』鰺ヶ沢町，1984，139頁。

78) 『鰺ヶ沢町史2』，前掲77）139頁。

79) 『東奥日報』明治26年（1893）9月14日。

80) 例えば，明治9年(1876)7月，当時下相野村（現・西津軽郡森田村）で周辺神社の神職を務めていた宮本村雄の記録によると，「明二十日赤倉沢水深ニ於テ雨乞之為登山致候間明早朝ヨリ御出張有之度此段及御通達候也」とあるように，神職達が雨乞いを行っている。『明治七年与利十年迄御用留四』明治9年（1876）7月19日条（豊島勝蔵解読『津軽新田記録2』，西北刊行会，1984），518頁。

81) 明治末期までは「降雨稀れにして作物宜しかざれば雨乞ひと称して人々酒肴を具へてここに来りて祈るに験あり」と，まだ雨乞いの場という認識は残っていたと考えられる。下沢保躬『岩木山信仰史』，近松書店，明治36年（1903），46～47頁。

82) 池上論文，前掲注7）③6～9頁。

83) 江田絹子「山が御神体の岩木山」，あしなか123，1970，5頁。

84) 『平山日記』安永元年（1772）条（青森県文化財保護協会編『平山日記（みちのく双書22)』，1967），358頁。

85) 楠論文，前掲注7）②151頁。

86) 池上論文，前掲注7）③2頁。

87) 『東奥日報』明治34年（1901）9月10日。

88) 『東奥日報』明治34年（1901）9月10日。

89) 『東奥日報』明治42年（1909）9月16日。

90) 『東奥日報』明治42年（1909）9月18日。

91) お山参詣時，大石口では麓にある大石神社で野宿したという。青森県立郷土館『関の民俗(青森県立郷土館調査報告第16集・民俗8)』，1984，107頁。

92) 黒瀧論文，前掲注43）30頁。

93) 『外浜奇勝』，前掲注16）332頁。

94) 『東奥日報』明治42年（1909）8月22日。

95) 柳川論文，前掲注1）①2頁。

96) 『東奥日報』明治26年（1893）9月14日。

97) 例えば，西津軽郡深浦町の事例があげられる。「お山参詣は（中略）朔日山の御来光（迎）を拝むのが最も有難い。深浦の人びとのほとんどは鰺ヶ沢の長平から登るが，それでも長平まで一〇里以上の道程である。もちろん徒歩であるから，どの部落も七月の晦日午前〇時から二時までの間に出立する。（中略）御来光を拝み，腹ごしらえをし，今度は百沢に下山する。麓の宿が近くなると，賑やかな下山囃子に合わせ，白紙を指にはさんで《バタラ》を踊り出す。」深浦町編『深浦町史 下巻』，深浦町役場，1985，415～416頁。

98) 柳川論文，前掲注1）①3頁。

99) 五所川原市金山の事例からもそれが窺える。「金山では明治四十二年の人の記憶によると三回ほどヤマガケを行った。最初，長平口から登った。（中略）前日に朝食をとり，地区から長平まで歩いていった。（中略）後には百沢口からツイタチヤマ（旧八月一日）で登った。このときは自動車で行った。登山口と下山口を違えてはならないものだといわれているが，長平から登って百沢に下りたこともあった。」五所川原市『五所川原市史 史料編1』，五所川原市，1993，504頁。

100) 品川著書，前掲注12）169頁。

101) 宮田論文，前掲注1）③279頁。

102) 吉村 迪「登山囃子で賑わう岩木山詣り」，岳人560，1994，133頁。

103) ここに堂社を構えるカミサマは，弘前営林署と契約を結び，赤倉の土地を借りている。江田論文，前掲注7）①337～339頁。

Historical Change of Pilgrimage Routes Climbing Up to Mt.Iwaki

Naoki KANEKO

Mt. Iwaki in Tsugaru district, Aomori Prefecture have been worshiped in Tsugaru, and people have made a pilgrimage every summer. This paper aims to clarify the historical change of pilgrimage routes climbing up to Mt. Iwaki.

In the Medieval Period, there were presumably a climbing route according to the legend. It started from the north foot, Tokoshinai, where the shrine and one or two temples of Mt. Iwaki were situated. It is supposed that the route was near the present Oishi-guchi one (the northeast route) where Akakura Valley was on the way. However, to avoid Akakura in which evil gods gave rise to mysterious phenomena, the shrine and the attached temples moved to the southeast foot, Hyakuzawa, and the climbing route came to start from there.

Early in the Edo period, pilgrimage to Mt. Iwaki to be continued until today began. The pilgrimage route in this period was only from Hyakuzawa where the shrine and the attached Hyakutakuji temple were situated. The other routes including northern Nagadai-guchi route in which old customs of pilgrimage were claimed to remain by some folklorists, were just used for collecting firewood and grass. Meanwhile, Akakura on the way of Oishi-guchi route, the legendary routes mentioned above, became the place where priests and people prayed for rain.

In the modern period, the anti-Buddist movement made Hyakutakuji temple extinct, and some customs of pilgrimage were changed. In addition to Hyakuzawa-guchi route, pilgrimage routes from Oishi-guchi, Nagadai-guchi and Dake-guchi (the southwest route) were opened. Akakura has changed from the place of prayer for rain, to the place where shamans called *Kamisama* practiced asceticism.